

会員近況



東京大学
経済学部 竹内 啓

長年の研究に一つの山 今年の前半、少し健康をそこね、現在ではほぼ回復したが、なお慎重にしなければならないとのことで、いろいろな会合などは失礼している。

OR学会のほうもしばらくご無沙汰していたら、今年度編集委員にされてしまい、またいくらかご奉公しなければならなかったが、健康のことなどで他の委員の方々にはご迷惑をおかけすることが多く申し訳ない次第であると思っている。

このところ狭い意味のORについては何もやっていないが、より広く「数量的方法の意味」というような問題については、ずっと関心をもちつづけている。

もっと狭く専門的には「統計的推定の漸進理論」について引きつづき研究している。ようやく最近になって一つの新しい山が見えてきた感じで、まだ10篇くらい論文を書く必要がありそうである。

10年以上前から考えていてわからなかったことが、フトしたことからはっきりするときわめてあたりまえのことに思えてくるのは、ときどきあることながら、やはり不思議な気がする。

(株)システム科学研究所
システム部 秋元 武

若人に贈る4条 若かりし頃は新しい方法などを知ると、それを使いたくて自分のまわりにある問題とあらば直ちに、この新しい方法を適用すべく、問題そのものを焼き直し、問題の一部でしかないものを、あたかも全体として処理をし、得々としていたものであった。——新しい方法などは確かに使い込んで、その対象範囲、前提条件などを体で覚えることが大切である。大学でも講義(頭で知ること)と実験・実習(体で覚えること)が行なわ

れている。これは、頭で知ることと体で覚えることは車の両輪のようにいずれをも欠くことができない。また、この両者のバランスのとれていることが必要である。

そのためには使い込むことが必要不可欠である。——だんだんとこのような経験を積んでくるにしたがって方法の適用そのものが目的でないことに気づき、やがて問題そのものの成立条件へと目が向いてくる。すなわち、問題の真の姿を捉える方向へと視点が移ってゆく。

この領域は、インターディシプリナリーな領域でいままでの専門化された狭い知識だけでは対処できないところである。ここでトライ アンド エラーをくり返し、悩みに悩んで人間的深みと成長が行なわれ、どうやら一人前のOR屋として認められるのではないだろうか。

私は、若人に大いなる期待をもってつぎのことをいいたい。

- 若いうちにチャレンジしろ、それが若さではないか
- 方法・技術の裏にひそむ思想をくみとれ
- 頭だけでなく、体で覚えよ
- 問題が「ニオイ」でわかるようになれ

ヤンマーディーゼル(株)
機械計算部 荒木 幹雄

ムダ排除運動に小ロット生産 当社のメイン工場の1つである長浜工場(滋賀県)では、いま生産方式の革命といわれている「ムダ排除運動」(通称MHN)が推し進められている。

従来のロット生産に変わり、小ロット生産による生産の平準化を行ない、ジャスト・イン・タイム方式といって、必要なものを必要なときに必要なだけ生産する。

つまり、自工程で加工に必要なものを、その時点で、前工程に取りにゆく方式である。

ロット生産では、生産計画の変更に対してはあまりにも対処することが困難である。その点、小ロットで生産していれば、設計変更+生産計画の変更に対して柔軟に応じることが可能であり、つくりすぎによる在庫を出さなくてもすむ。

また小ロット生産では、従来あまり改善のメスが入られなかった個所が浮彫りにされ、とくに段取替え時間が問題になってくるが、作業員自身の改善への問題意識が向上し、治工具やライン編成を見直すことにより、より生産コストの低減に寄与できると考えている。

(株)日立製作所 長谷川孝一

富士通(株)
国際情報社会科学研究所 田川正二郎

どこがおかしい「評価」のされ方 研究テーマを「評価」し、かぎられた資源—ヒト、モノ、カネ—を「効率的」に配分し、最大の収益を得るとは、どういうことなのか？ 評価データを「科学的手法」で処理したとしても、そのもとになる評価データは、結局、人が評価したものであるから、その評価する人の能力によって、研究テーマはいろいろに評価される。評価する人が、ただ1人なら、評価した結果の当たりはずれは当然大きくなるし、逆に評価者の数が多ければ、当たりはずれが小さい平均的な値に落ち着く。ということは、過不足のない誰もが納得のいく研究テーマに、最大の評価が与えられることになる。したがって、すばらしい研究テーマ（結果としてわかることだが）も、多人数評価集団では、オミットされてしまう可能性が大きい。つまり、世界をリードするような研究テーマは、いい評価を得られないわけである。日本は、いつまでたっても、後進国から抜け出せない。どこがおかしいのでは？

川崎市水道局
工務部企画課 萩原 健良

水道事業とOR 水道事業は、昭和48年秋の石油ショックを契機とする激しい経済の変動の波に見舞われ、水道需要の落ち込みそして低迷がつづいている。

日本の経済自体が低成長、安定成長の時代に移行しようとしている現在、水道の普及率が高水準となった情勢を考えると、建設拡張の時代から維持管理の時代に入ったと思われる。

ORは、建設拡張の時代においては需要予測やそれにもとづいた各水道施設の設計、管網の設計などに利用されてきたが、維持管理の時代においては各水道施設の経済的運転、管理などに利用されていくと思われる。

これからの水道事業をとりまく環境として、生活様式の変化、下水道の普及、都市構造の変化、水道料金改定の影響、かぎりある水源と汚染、地域住民の考え方の変化、異常気象の定着、経済の変動など多くの問題が出てくるとと思われる。

これらの社会システムにおける問題を解決するには、科学的な管理手法が必要であると思われる。そういう意味で、今後のORの発展に期待している。

ドイツでのORシンポジウム 私は現在、西ドイツMannheim大学の数学と情報科学科の博士候補生として、数理計画法、とくに非線形計画法を中心に研究しております。指導教授はProf. Oettliで、いま教授とともに取り組んでいる問題は、制約式が集合値関数の場合の必要条件、十分条件を求めることです。

ところで、先日、AachenでORのシンポジウムがあり、それに出席してきましたので、少し触れてみたいと思います。10のセッションにわかれており、それぞれ、1. 応用 2. 動的計画法と制御理論 3. 整数計画法 4. グラフとネットワーク 5. 線形と非線形計画法 6. 数理経済学とゲームの理論 7. 経済学 8. 生産と在庫管理 9. 統計的品質管理と決定理論 10. 確率過程と待ち合せの理論、でした。発表時間は1人45分間で、ドイツ人らしい活発な討論がよく見受けられました。私は第5セッションを中心に聞きましたが、このセッションの論文件数は18でもっとも多く、この関係の研究者がドイツに多いのに驚きました。内容は、線形計画法の解法に関するもの5件、非線形計画法については7件、その他は一般的で、関数の性質や、変分不等式などの問題があつかわれておりました。日本のOR学会に比して、数学的問題も多く取り上げられているのが目につきました。

茨城大学工学部
情報工学科 牧野 都治

センスを育てる このところ、統計関係の講義に終始している。先日テストをした。「問題：歩行者天国の日の（東京）銀座地区への人出を知りたい。どうしたらよいか。」——大多数の学生は、駅の降車人員を調べるとか、通りを歩いている人の数をカウントするなどに焦点をおいた苦しい解答をよせていたが、それらの答案にはあまりよい点は与えられなかった。しかし、おもしろいのが2枚あった。1枚は、ゴミの量によって人出を推定するというものであり、もう1枚は“自分は新橋で暮らしているので、新橋駅の降車人員を調べればわかる”というのである。ホントかウソか知らないが、こんな説得力のある答案を書ける学生を育てたいと願っている今日この頃である。